

書叢ギカア
ラトクレエ
作ルータスンマフホ

特100
252

~~274
975~~

0m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10m 50 1 2 3 4 5

始



持100
252

編四十五第書叢ギカア



埃太利文豪

フウゴオ・フオン・ホフマンスタール作

エ
レ
ク
ト
ラ

大正
3. 9. 10
内交

アカギ叢書發刊の辭

予往年將に中學を終へて、生涯を捧ぐべき職務を選定する必要に迫らるゝや、
塊惱之を久うして遂に書籍出版業を得たり。即稍狂熱を有したる文筆の樂を棄
て、直に一書肆の丁稚となつて初めて轅を握るや、爾來葱忙の間に既に六星霜
を経たり。未だ何等の得る所無きを耻づと雖、當今所謂書籍界の狀勢を見、立
志以來の『書籍によりて享受し得べきあらゆる幸福は、必ず之を一般に普及せ
しめ度し』との信念に至りては、年を経て益々固きを覺ゆ。是予が菲才自ら顧
みず大正三年元旦を期し、書籍出版業として微を此處に致すべく立ちたる所以
也。

當今書籍出版業たる予の最も痛恨に堪えざるものあり。古今東西の科學、藝
文にして、誠に珍重すべき内容を有し乍ら、吾國に於る普及の程度眞に微少を
極めたるもの之なりとす。原因とすべきもの多々ありと雖、書籍の價高きに過

るたれらせ演て於にクルヨーユニ
装扮の『ラトクレエ』のてしと劇歌



ラトクレエ

ステスレオ

ぐる一也。内容難澁を極めたる一也。尨大なるが爲に繁忙の今日、止むを得ず
閑却せざるを得ざるもの一也。先づ第一着手として今日アカギ叢書を刊行する
に至りたるは、誠に此處に見る所あれば也。即アカギ叢書は各冊を全部金十銭
にて提供す。外國語、古代語は、全部通俗にして度に適せる現代語に翻譯す。
如何に尨大なる内容をも、妙味を失はざる限り、必ず袖珍百頁にコンデンスす。
依つて以て従來専門家、篤學者のみの專賣に委したる宇宙の眞理、學術の寶庫
の、高價、尨大、難澁の三大門戸を開放して、あらゆる人士の活用に供せんと
す。未だ善美を盡さずと雖、予が事業の第一聲としては私に誇りとする所也。
希くは大方の諸賢、幸ひに善導を賜へ。

大正三年三月

赤城正藏白

面臺舞の『ラトクレエ』



飾装臺舞の氏ゲーレク

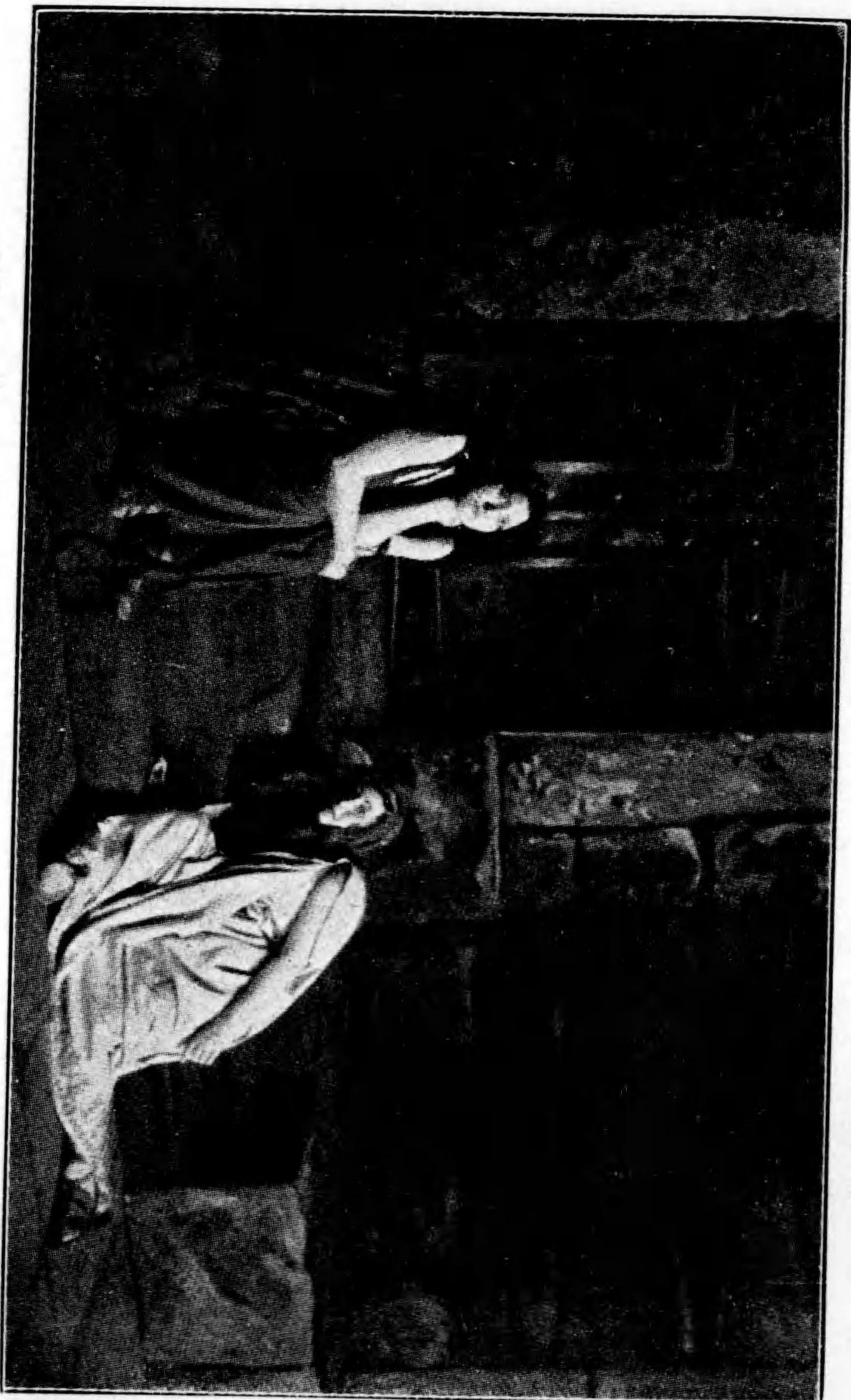
ドレスデン宮廷
歌劇場公演の
『エレクトラ』の
舞臺面
エレクトラ
(アンニイ・クルル扮)
オレステス
(カアル・ベルロン扮)



ラトスネムテリク
(扮クンイハ)

ラトクレエ
(扮上同)

面 臺 舞 の 『ラ ト ク レ エ』 演 じ たる ぜ 演 じ し と 劇 歌



演 所 て つ 依 に 奏 樂 の ス ウ ラ ト ヌ て 於 に ヴ デ ス レ 年 九 〇 九 一

解 題

フウゴオ・フォン・ホフマンスタールは、一千八百七十四年二月一日、ウキンに於て生れた。彼れは、その生都に於て、當初法律を學び、その後、更に文學と、語學とを學んだ。そして長い間旅行をしてゐたが、その後またウキンで暮らした。

一千八百九十二年、その叙情的戯曲『昨日』(Gestern)をライプツヒで出版した。それから又、『拔萃詩』(Ausgewählte Gedichte)がある。一千九百〇三年には、『チ・アンの死』(Der Tod des Tizian)といふ劇詩を書き、それから引き續いて、『痴人と死』(Der Tor und der Tod)『窓に倚れる女』(Die Frau im Fenster)『劇場に於ける歌妓』(Die Sängerin im Theater)『皇帝と魔女』(Der Kaiser und die Hexe)『エレクトラ』(Elektra)『救はれたるヴェネディッ

』(Das gereinigte Venedig) 『ヒタイプスとスフィンクス』(Oeypus und die Sphinx)などを書いた。これらの中でも、この悲劇『エレクトラ』は、歐洲の劇壇を震動させたもので、一千九百〇三年、伯林の『小劇場』で初演されて以來は、到る處に於て上演され、歌劇にまでも演ぜられた。依つて、今、本書『エレクトラ』を以て、この詩人の代表作として選んだ譯である。

大正三年七月十三日

編 者 識

エレクトラ

埃太利

ホフマンスタール原作
村上 静 人 編

發 端

トロイ征伐の總大將、アガメムノン大王は、長い間出征してゐたので、その王妃クリテムネストラは、良人の留守中に不義を働いて、エジストスと言ふものと密通したところが、味方の詭計が圖に當つて、長い事支へて來たトロイの市も、希臘軍の爲めに全く攻め落された。そして、希臘軍は愈々なつかしい故郷へ、十何年ぶりかて歸ることが出来るやうになつた。王妃クリテムネストラは、これを聴くと、その密夫エジストスと語合つて、良人を殺して了はうと

計つた。そしてアガメムノン大王が歸つて来た、その祝ひの日に、この目的を遂げる事が出来た。

彼等は又、アガメムノン大王の王子、オレステスも殺さうとした。その頃、未だ幼かつたオレステスは、姉の王女エレクトラに助けられて、フォオシス王ストロフィウスが、叔父に當るので、其處へ逃げて行つて、一命を取り止めた上に、その保護の下に成長した。姉の王女エレクトラからは、幾度も使者が来て、父大王の仇を報いなければならぬと、その都度、言つて来た。オレステスは成長すると、アポロ神の神託を仰いで、父の仇を討つ決心の臍を固めたのであつた。

王女エレクトラは、今や母王妃に背向いて、廷臣一同の輕侮と、嘲笑の中にありながら、日夜、血なまぐさい復讐の夢を見てゐた。妹の王女クリソテミスは、その娘らしい心で、いそぐと姉王女を勞はつて、陰になり日向になつて、

その身に過ちのないやうに心配した。エレクトラは、妹の王女にも復讐の思想を吹き込まうと努めたが、女にさだまる一生を送らうと願つてゐるクリソテミスは、それに従はなかつた。そして、父大王は弑せられるし、兄オレステスは歸つて来ない。彼女は、復讐といふ事に氣の狂つたやうな姉王女のお庇で、自身も亦、悪人共から睨まれてゐて、宮殿の外へは、一步も出ることを許されなない。けれども、エレクトラが望んでゐるものは、妹の王女ではなかつた。彼女は、弟王子オレステスの歸りを翹望してゐた。そして一時も早く、成人した弟の手を借りて、悪人共を殺して、父大王の英靈を慰め度いと、それ計り考へてゐた。彼女は父王の弑せられた時の事を、寸時として忘れる事が出来なかつた。その光景は、眼の前から追ひのける事が出来なかつた。彼女は、絶えず、この血と、復讐の血なまぐさい夢とを見續けてゐた。宮殿の中でも、誰れ一人として、この王女エレクトラの心を解する者はなく、従つて、その力にならうとす

る者は皆無と言つて可い位である。加爾、悪人共、——主として、彼女の母王妃クリテムネストラと、その姦夫とは、王女エレクトラを、暗黒な塔の裡に幽閉めようと考へてゐた。

王妃と、その密男とが恐れ憚つたのは、エレクトラの外にもう一人あつた。それは、言ふまでもなく、騒亂を逃れて、一命を全うした王子のオレステスで、アガメムノン大王の遺子である。悪人共は手を盡くして、このオレステスを捜し求めた。そして、オレステスらしい者が数多殺された。オレステスが死んだと言ふことは、王妃を初め、宮殿の人々にとつては、どの位の安堵と慰藉とを與へるかは實に想像の外であつた。彼等は、それでこそ、初めて枕を高くして寝られると言ふものである。半狂亂のエレクトラなどは、恐るゝに足らない。唯、王子オレステスさへ、この世から居なくなつて了へば、もう心配する事は、何にもないと云ふのであつた。そして、オレステスと稱するものは、これまで

数人殺されたのであるが、しかし、未だ夫れでも、この不安は止まなかつた。のみならず、王妃は毎夜、オレステスの夢を見た。そしてその恐怖と苦惱との爲めに、殆ど病氣のやうな日を暮らしてゐた。

エレクトラは、それを知つてゐた。そして、いつまでも、オレステスの歸りを待つてゐた。けれども、時折、もしや弟が殺されたら、復讐は、自分達姉妹の手でしなければならぬと思ふこともあつた。

『王女様は、何處におゐてなさるのであらう。』

と、一人の婢女が水瓶を持ち上げながら、斯う言つた。宮殿の裏の、内庭の片隅にある汲井戸の周圍には、數人の婢女が水を汲んでゐた。この内庭は、下人どもの住む所になつてゐる。丈の低い建物で圍まれてゐる。

二番目の婢女は、薄暗くなつた四邊を見廻しながら、

『ほんにあのお方が、歿つた父君のことを、こゝら邊りの鳴りひゞく程、聲高に叫ばせらるゝ刻限ぢや。』

と、言ひも終らぬその中に、王女エレクトラは、薄暗い正面の戸口から走り出た。其處に居合せた人々は、黙つてその方を見た。王女は、片手を額際上げた儘、野獸のやうに、もと來た方へ走り去つた。

最初の婢女は、一同に向つて、

『まあ、貴女がた、あの狂ほしい御容子を御覽じましたか。』

『ほんに、氣味の悪いあの御容子。宛然野猫を見るやうに。』

と、二番目の婢女が答へた。すると、三番目のが聲をひそめて、

『お横になつて、呻いておゐてなされますな。』と云ふと、

『王女様は、暮れ方には、いつもあのやうにして、呻いておゐてなさる。』

と最初の婢女が言つた。三番目のは、語を繼いで、

『いっぞや妾は、お傍近う通りました。』

『お傍近う見らるゝ丈でも、王女様はお嫌ひなされる。』

『お傍へ寄り過ぎましたれば、下りや、下りや、蠅虫ども、えゝ下らぬか。』と、

猫のやうにお喚きなされた。』

と、三番目のが語り繼げると、『蠅虫ども、下らぬか』と、『と、四番目のが

眼を丸くして繰り返した。

「妾の瘡傷に觸つてたもろな。」かう仰せられながら、長柄の藁束でお追ひなされた。」

「蠅虫ども、下らぬか」と、四番目のは猶だ呆れてゐる。三番目の婢女は、なほも語り繼いで、

「この苦惱の甘さは、蠅虫どもには振舞はれぬ。泡ひとつ味はせられぬ。」と被仰つて。」と云つた。

「早う行きや、早う行きや。甘いものを詰め込んで、そして、寢所へもぐり込みや。」と、そこで貴女は——。」

と四番目の言ふと、三番目の婢女は、頷いて、

「何の黙つて、聞いて居られう。」

「貴女は返答なされたな。」

「しないでかいな。」御食事ならば、貴女にも。」と、かう言ふと、跳ね起きて、それはそれは恐ろしい、むづかり顔をなされたが、妾等の方へ、猛禽の爪のやうに指を曲げて、「此の身體の中にある熊鷹に、餌を呉るゝのぢや。」と被仰つた。」

「そして此方は、どう言うたぞいの。」と二番目が訊いた。

「道理こそ、腐つた肉を嗅ぎ廻り、日數の経つた死屍の御穿鑿をなさる筈。」と、マアンのやうに言ひました。」

「王女様は、何と言はれた。」

「帛を裂くやうな、鋭い聲を立てたなり、その儘倒れてお了ひなされた。」

婢女達は、こんな談話をしてゐる中に、各々水を汲み終へた。

「それはさうと、お王妃様は、何であのやうな怪物を、宮殿にお置きなされるのでござんせう。」

と、最初の婢女は聲をひそめて言つた。

『お王妃様には、ほんたうのお女子だからでございます。』と、二番目のが答へた。
『よし、あの方が、妾の子なら、妾は幽閉めて置かうもの。』
と最初のが歎息した。

『けれど、あの方達も、随分酷いことをなさるではありませんか。御膳部も、
犬と同じ食器で、そして。』と。四番目の婢女が、一段と聲を低めて、『王女様の
打たれるのを、御覽なされたか。』

と言つた。二番目の婢女は、未だうら若い少女だが、先刻から、氣が昂ぶつて
居るやうに、慄へ聲で、

『妾は、王女様の足許に、この身體を投げ出して、お御足に接吻させよう。國
王の姫君でありながら、あの亂暴浪籍をお堪へなさるとは。妾は、王女様のお
御足に、聖い匂香を灌ぎかけ、この頭髮で拭いて上げよう。』
と喚くのを、今まで黙つてゐた婢女の長が睨めつけて、

『さあ、彼方へおいで。』と突きやつた。

『あのやうな氣高い方が、又とこの世にありませうか。檻樓を纏はせ、戸口に
御寝ならうとも、誰れあつて王女様を、まともに見る事が出来ませうぞ。』と云
つたが、又更に一段と聲を張り上げて、『ほんに誰れ一人、この宮殿で。』と附言へ
た。すると、

『さあ、彼方へおいで。』

と、婢女の長は戸をあけて、少女を中へ突きやつた。少女は戸口に立ちなが
ら、

『王女様と、ひとつ空氣を吸ふ價値もないお前さま方。何處ぞの古い物置で、
お前さま方の溢れて死んだ所が見度い。エレクトラ様に、爲向けた事の應報は
觀面。』

と、慄へ聲を振り搾るのを、婢女の長は、ピツタリと扉を締めて、戸口へ背

をあてがひながら、

『皆の衆、お聞きなされたか。マア、妾等が、王女様に何をしたらばとて、あのやうに言やるのか。ほんに王女様は、母君様のお差圖で、妾等と、一緒に膳部へお坐らせ申すと、食器を突きやり、唾吐きかけ、妾等のことを、犬ぢやと被仰る。』

『それから又、王女様は、「どのやうな犬畜生でも、あのやうな穢いことはせぬものぢや。お前方は、その水を、綺麗な水を床に注いで、消ゆる期のない弑逆の、血潮の跡を洗つてゐるのか。」とな。』

と、最初の婢女が、斯う言ふと、三番目のも一緒になつて、

『お前方は、罪汚れを、洗ひ落さうとしてゐるが、假令、どれ程洗うても、その罪汚れは、晝となく夜となく、床の隅に戻つて來ようぞ。』ともな。』

『お前方の身體は、塵埃に還つて了ふ。それが定まる宿縁ぢや』とも。』

と、最初の婢女が言つた。そして、婢女達は、水瓶を抱へて、左側の家の中へ入つた。婢女の長は、一番後に續いて、

『もし妾等が、子供でも連れて居ようものならば、かうぢや。「呪はれた者よ。血塗れになつた階段の上で、犬見たいにして生れた子供。」と、かうぢや。噯。皆さん、さうは被仰らぬかいの。』

『その通り、その通り。』と、先きに立つた婢女達が、部屋の中から斯う答へた。すると、間もなく、その言葉に續いて、『あれえつ。』といふ叫び聲の聞えたのは、あの年若の婢女が、一同に責め苛まれたものらしい。

婢女達が行つて了ふと、場所は暫く空虚になつて、寂とした。やがて、薄暗い部屋の戸口から、王女エレクトラが現はれ出て、燈火の、赤く揺らめく影に佇ずんだ。燈火は、無花果の枝越しに、そこら邊の大地や壁の上に、血痕のやうな斑點を投げた。王女は唯一人、シヨンポリと佇みながら、盡きぬ歎きの繰り言を、繰り返すのであつた。

『あゝ、天地の間に、たゞ一人、一人ほど悲しいものがあらうか。父君は、他界へおいでなされた。あの冷たい墓の中へ。』と、大地を見詰めながら、『父君、貴方は何處におゐてなされます。なつかしいお顔を、ま一度見せては下されぬか。おゝ、時ぢや、父君、時でござりまする。今こそ、母上と、あの男——王者の臥床に添臥のあの男とが、貴方を弑しまゐらせた時でござりまする。二

人は、浴殿で貴方を弑した。おゝ、あの恐ろしい、御最期の有様は……。兩の眼に血は流れ、あたりは血烟立ち罩めて……。あの男は、あの卑怯人は、貴方を引き出した。お頭と、それから、お御足とを引き摺つて。貴方はお眼を見開いて、二人の者を睨みつけ、あたりを見廻しなされました。おゝ、今夜もさうしておゐてなされる。』

王女は、眼前を見詰めてゐたが、ふと一方に眼を附けて、

『あゝ、お歸りなされた。父君。おいでなされましたな。静かに、そして出しぬけに……。貴方はお眼を見開いて、紫の王冠は、見るも無惨な前額の傷口に喰ひ込んで……。おゝ、父君、おなつかしうござりまする。萬望今宵は、いつまでも、一緒にお止まり下さりませ。昨日に變らぬ今夜ならば、彼處の陰に立ち現はれ、娘の許へお戻り下され。御無念を齎らす日は、やがて程なく参りませうぞ。時が星から降るやうに、數多の人が流す血も、貴方のみ墓へ流れませう。』

水瓶の水が、地に溢れるやうに、鎖がれた弑逆人、又は男女の分ちなく、加擔の者が素裸も、大理石の瓶かと許り、流るゝ血潮は波と漲り、川と溢れ、生命の水が軀から、流れ出づるでござりませう。その時には、あのお馬を、貴方の墓へ捧げませう。死の匂ひを嗅ぎつけて、馬は悲しく嘶えませう。それから、あの犬も屠りませう。御狩の供にいで立ちては、父君の足を舐め、手づからお投げなされた肉を、啖ひましたあの犬が、血を流すのは當前ぢや。さてその後で、貴方のお流しなされた血が、紫の雲とたなびく時、貴方の息子オレステス、二人の娘の吾々ども、三人揃つてみ墓の周圍を、踊り廻るでござりませう。果なる屍骸に踏みのぼり、妾の舞を見る者に、妾の舞へるその影を、遠方から見る者に、妾はかう言ひませうぞ。「血と肉とを牲にした、盛んなる王者の祭儀を見よ。稜威かしこき奥都城の周圍をば、氣高き子らが舞ひ踊る、勝利の舞の手振を見よ」と。」

と、王女が熱狂した獨語を、忍び寄つた妹の王女、クリソテミスが、内庭の戸口に立つて、氣遣はし氣に聴いてゐた。

『エレクトラ』と、妹王女は私やかに姉王女を呼んだ。姉王女のエレクトラは、吾が名を呼ばれた夢遊病者のやうに、身の廻りを見廻したが、よるくとして、ふと妹王女の氣遣はし氣な顔を見て、眉を寄せた。

『何といふ顔ぢや。』

『何といふとは、妾の顔が、どのやうに見えまする。』

『さあ、言や。何の用ぢや。早う言や。ちやつと言うて退きや。その上で、この儘彼方へ行つてしまや。』

妹王女のクリソテミスは、打たれるのを防ぐやうに、手を上げた。

『何で、手を上げるのぢや。あの斧が、父君の上に落ちて來た時にも、まッそのやうに、お手をお上げなされた。さあ、何の用ぢや。母さまの娘御。』

『姉上、あの人達は、何ぢややら、怖い事を謀んでゐるぞえ。』

『なに、あの二人の女奴が。』

『えつ、二人とは。』

『一人は母さま。もう一人の女と言ふたは、それあの卑怯者、弑逆人、臥床ての勇者、エジストスのことぢや。で、あの二人は、何をする氣ぢや。』

『日の光も、月の光もさゝぬ暗い塔へ、姉上、貴女を幽閉めようと言ふのぢや。それは眞個ぢや。妾は、それを聴きました。』

エレクトラは、笑ひ顔をして、

『そのやうな事は、聴いたと思ふ。屹度、食後に出た話だ。あの男は、大聲で嘘八百の手柄話、自慢囃をするのが癖ぢや。腹ごなしには好からうの。』

『いえ、食後ではござりませぬ。あの人達、二人ぎりで……。』

『なに、二人ぎりで。どうしてそれを。』

『姉上、妾はあの扉口で。』

『扉などは、明けて置かねが可い。烈しい息づかひ、騒がしい喘聲の外に、部屋々々には何にもない。部屋の中で、呻き聲が聞えても、扉などは、明けて見ぬが可い、時々は、二人ぎりて居ることもあらう。それでも、扉などは、明けて見ぬが可い。拔足なぞして歩きやんな。それよりか、妾のやうに、ぢつと大地に坐つてゐて、死の降るのを俟つが可い。』

『それでも姉上、妾には、貴女のやうに坐つてゐて、暗を見つめては居られませぬ。妾の胸には、焔が燃え立ち、家中を追ひ廻します。どの部屋にも、落着かれず、戸から戸へ、闕を出つ入りつして居ります。一旦外へ出た時には、どの部屋でも、妾を呼び込むやうで、人の居ない明部屋は、背向から、妾を視てゐる。恐ろしい思ひの爲めに、日も夜も、膝が打ち慄へ、咽喉は締め付けられ、すゝり泣きさへ、出来ぬほどでござります。どうすれば好いのやら、妾に

は判りませぬ。せめては姉上、可憐想と覺し召せ。』

『そりや、誰れを。』

『姉上、鐵の錠で、妾を大地へ打ちつけたのは貴女ぢや。貴女さへおゐでなさねば、あの人達も、妾を釋して呉れませう。貴女の恨み、憎しみの心が、おありなさらなかつたら、この獄屋から、釋して呉れたでござりませう。妾は、早くこゝを出度い。こゝに居ては、死ぬる日まで、一夜さへも、おちいゝとは寢られませぬ。死ぬる日までには、一度でも、せめては、女子並みに生きて見度い。死ぬるまでには、自分の子供が抱いて見度い。あの人達が、水呑百姓の所へ縁付けても、妾は、そこへ嫁に行かう。暴風が、小家に吹きあてる寒い夜には、自分の生んだ子供を、この肌で暖めてやりませう。もとく、あのやうな婢に打ちまじり、晝夜わかつたず、死ぬ苦しみに、悩んではゐられませぬ。姉上、お判りになりましたか。』

『おゝ、可憐想に。』

『いや、可憐想なは姉上、貴女ぢや。このやうに苦しんでも、それが何になりませぬ。父君は、お果てなされた。兄上は歸られぬ。お音信も絶えて了つた。月日が経つに従つて、姉上様も妾も、面變りがする計り。戸外では、美しい太陽が廻つてゐる。あの弱々しい婢女達も子を設け、子供達に乳を吞ませて、その成長を楽しみに、働いて居ります。それに、妾等二人は、籠の中の鳥のやうに、ぢつと斯うして居る計り。誰れも來ては呉れませぬ。兄上も、お歸りなされませぬ。音信どころか、噂さへ聞かれませぬ。こんな暮らしをする程なら、いつそ死んだが増してあらう。えゝ、えゝ、妾も女ぢや。どうぞして、女子並みの生涯を送り度い。』

『そのやうな事を思つて、恥かしいとは思はぬか。』と、姉王女エレクトラは、妹王女の繰言を聞いて、嘲笑むやうに、

『そのやうな事を言うても、恥かしうは思はぬのか。そのやうな考へは、あの恐ろしい人達に、休みの場所を與へるも同じ事。卑しい獸を狎らすやうなものぢや。あの女は、添臥してゐる男の眼を、おのれが胸で蔽ひながら、臥床の後に忍んでゐる、斧と毘とを持った男に、眼配せをして、それと知らせた。』

『お、姉上、貴女は、恐ろしい……』

『何で、妾が恐ろしい。お前は、そんな弱い音を吐く女か。』

『貴女は、お忘れなさらぬやうだが、妾は、何にも覚えてゐない。何ひとつ、今日の事を、明日までは、覚えて居りませぬ。流れのあとの水でもなし、梭に引かるゝ絲でもなし。妾は妾ぢや。神に祈つてもう一度、瞭然自分を見付けよう。妾も此處を出てしまふたら、この恐ろしい夢などは、直ぐに忘れて了はうもの。』

『なに、忘れる。』と、姉王女エレクトラは、聞き咎めて、『では、獸にも劣ると

言ふのか。ほんに獸といふものは、餌食を半ば食べかけても、その儘眠つて了ふとか。また死に瀕んでゐる際でも、餌を喰べ初めるといふ事ぢや。おのれが生みの子供をも、食うて饑をしのぐものとか。けれども妾は、獸ではない。妾は、どうしても忘れられぬ。』

と云ふと、妹王女は、

『あゝ、妾は、いつまでも、このやうな餌で、養はれなければならぬと言ふのか。そのやうな恐ろしい食物は、見たくもない。匂ひさへ嗅ぎ度うない。人の心には、餘り恐ろし過ぎるものぢや。そのやうなものが迫うて來たら、家の中へ、畑へ丘へ逃げて行かう。そのやうなものと、同一場所には住まはれぬ。妾は早く逃げ出し度い。そして、恐怖などと言ふものを、知らない無邪氣な子供が欲しい。あの美しい泉に浸して、この身體を清めよう。二つの眼も洗ひませう。さうしたら、恐れげもなく、母親の眼を、その子達から見上げられよう。』

すると、姉王女は、妹王女のこの言葉を、嘲笑けるやうに、
 『母親の眼は、見上げられても、どうして、父親の眼は見上げられる。』と云ふ
 と、

『おゝ、姉上。』と、妹王女のクリソテミスは、恐ろしさに斯う叫んだ。

『お前の子供は、お前が父上を見るやうに、お前をも見るかも知れぬ。』

エレクトラが斯う言つた時、妹の王女は泣き出した。

『何が悲しい。何を泣くのだ。さあ、おいで。お前は、彼方へ行くが可い。お

ゝ、騒がしいあの物音は。あの人達が支度した、あれはお前の祝言か。あの、

馳せ廻る聲音は。おゝ、御殿中のあの騒ぎは。みんな出産で惱んでゐるのか。

いや、虐殺が初まつたのか。』

『姉上、まあ、そのやうに過ぎ去つた事を。』

と、クリソテミスが遮るのを、姉の王女は睨みつけて、

『なに、過ぎた事を。いや、又彼處で初まつたのぢや。妾に判らぬと思ふのか。
 あの階段を、引き摺つて行く屍骸の音、人々の低い聲、血潮のしづく、着物の
 音。』

『さあ、姉上、一刻も早く。』

クリソテミスは、姉王女の手を取つて、逃げようと勧めたが、姉王女は聞き
 入れずに、

『もう、今までの妾ではない。妾は、あの女の手から、斧を奪つて、あの女に。』

『さ、さあ、姉上、どうぞ隠れて下さりませ。あの人達に、見られては可けま

せぬ。母上は、御不興なのでございます。夢見でもお悪かつたのでござりませ
 う。』

と、言つてゐる中に、多勢の物音が、漸次に近づいて來た。クリソテミスは、
 姉王女の手を握つて、

『さあ、彼方へ。あ、あの廊下へ参ります。母様は、夢を氣に掛けておゐて遊ばす。どんな夢かは、知りませぬが、何でもオレステスの夢だとやら。そして、咽を絞めつけられた人のやうに、ひどく夢魘れるといふ事ぢや。』

姉王女エレクトラは、心地好げに微笑んで、

『それこそ、妾がさせた業ぢや。その恐ろしい正夢は、皆妾の胸から出たのぢや。オレステスが母上を、追うて行く聲が、寝てゐる妾にも、聞えて来る。部屋へ入つて、臥床の帷帳をかゝげると、母上が、呀と言つて、轉び出る。オレステスは、その後から、階段をいくつも降りて、闇よりも暗く、墓地よりも淋しい窖の、奥深く追つて行く。母上は、よろめき、逃げ廻る。オレステスは、その後から、左手に炬火、右手には斧を打ち振つて、獵犬のやうに追ひ詰める。その暗黒の中にはな、父君が立つて居らるゝのぢや。暗黒の中でも、妾には、父君のお姿が、ハッキリと眼に見える。父君は、何も仰せられぬが、爲

べき事は、爲なければならぬ。父君の脚下まで、追ひ込んで、斧を打ち下さねばならぬ。』

と、言つてゐる中に、正面の戸口の彼方、廊下の中は、炬火と人影で、一杯になつた。妹の王女は、足も地に付かぬやうに、

『あれ、最早其處へ来た。母様の先には、大勢の侍女共が、手に炬火を振りかざし、牲に捧げる獸を率いて、そして、その獸を屠る小刀を持つて。あゝ姉上。母様はあの通り、恐れ慄いておゐてなされる。でも、物凄い御容子。おゝ、母様の前へは、おいてなされますな。せめては、今日一日だけでも、今宵、この一時だけでも。』

妹のクリソテミスが、斯う云つて引き止めるのを、姉の王女は、冷やかに見やつて、

『いや、今夜は、母上とお話して見たうなつた。今までは、碌々お話爲な

つたから。』と答へた。

窓から見ると、廊下一杯に、炬火の光に輝いた行列が、騒立つて遣つて来た。牲の獸を率いて来る音、獸を叱る聲、獸の啼聲、鞭の空気を切る音、進み過ぎる獸を、さうは爲せじと引き戻す音、たどろぎながら、進み来る獸の蹙音、それらが、雑然と入り混つて聞えて来た。すると、

『あゝ、妾はもう、此處には。』

と、妹のクリソテミスは、斯う云ひ捨てた儘、内庭の戸口へ駆け込んだ。

やがて、王妃クリテムネストラが、打ち開かれた廣い窓に現はれた。炬火の灯に照らされた、その蒼白い顔は、着たる衣裳の緋の色に映えて、なほ一層青白く見えた。濃紫の装をした侍女に身を凭せて、寶石あまたちりばめた象牙の杖を力に、其處まで歩いて来た。黒髪長く背後に垂らし、うしろに引いた長い裳の端は、黄色い装をした女が、重げに持つてゐた。王妃の全身は、寶石と呪符とで、隙間なく飾り立てられ、兩の腕には腕輪、指には指輪が輝いてゐた。つと立つた儘、窓の方を見つめてゐるエレクトラの姿を見ると、王妃は、忽ち重たい眼瞼を擧げて、兩の眼を大きく見張つた。そして窓の側に寄つて、持つたる杖で、娘を指し示しながら、何か言はうとしたが、その身體は、忿怒の爲めに慄へた。

『お前は何かや。妾を見掛けて、毒々しく首を上げ、氣味の悪い舌を吐くのか。妾が特別の慈悲を以て、この宮殿に置いて取らざるを、可い事にして、爲度い三昧。あ、又、その眼付で、妾を睨め殺さうとするのだな。お、神様、何故このやうに、お苦しめ遊ばします。妾をお見捨てなされるのか。これ迄の心づくしも、水の泡と消え失せたか。吾がこの身體は、雑草生ひ茂る廢園のごとく、刺草の茂るに任せながら、自らには、それを引き抜き、刈り盡くす力も失せたのか。あ、神々達、何故このやうに、お苦しめ遊ばします。』

と、王妃の煩え苦しむ聲を聞いて、エレクトラは、意地悪く笑ひながら、

『なに、神様とや。ほんに母上、貴女は、その儘女神様ぢや。あの神々達と、同じやうに。』と云つた。

王妃は、傍の侍女を振り返つて、斯う訊いた。

『お前方には、娘のいふ事が判りますか。』

『王妃様が、神の苗裔だと、仰せられるのでござります。』

と、一人の侍女が答へた。裳の裾を持つてゐる女は、囁くやうに、

『いや、あれは、下心があつて、被仰るのでござります。』と言つた。

『長い事、忘れてゐたものゝやうに、何とやらなつかしい。娘は妾を、よう知つてゐる。けれども、彼女の胸に、何があるかは、誰れも知らぬ。』

眼瞼の重さうな眼を伏せて、王妃クリテムネストラはかう言つた。そして、彼の侍女と、装裾を持つ女とが、王妃の背後で、何ごとをか私語き合つた。エレクトラは、

『唯今の母上は、往時の母上ではありませぬ。毒蛇が貴女に纏うてからは、優しいなつかしい母上に、用もない事を言はせたり、安らかなお心を、攪亂したり致しました。貴女は、只もう夢中になつて、いつでも、夢を見て居られた。』と云つた。

『妾は、彼處へ降りて行つて、王女と話をして見度い。皆の者は、構はず奥へ。今宵は、狂ほしい容子もなく、典藥のやうな口を呷く。何事に依らず、時の支配を受けぬはない。月日が経てば、どのやうな忌はしい顔付も、さほど厭てはなくなるものぢや。』

と、王妃は斯う云つて、窓側を離れて、正面の扉口へ立ち現はれた。侍女はその側に従ひ、裳の裾を持つてゐる女は、その後には、炬火の灯が照らしてゐた。王妃クリテムネストラは、扉口を降りながら、

『どうして、妾を女神だと言ひか。下心があつての言葉なら、少しは、嗜んだが好からう。美しい日の目を見て、心地好い空気を吸ふのも、是れ切りにならうも知れぬ。』と云ふと、王女エレクトラは、

『貴女が、神でないのなら、何人が神でござりませう。妾は素肌で、貴女のお膝の上に乗せられ、あなたのお胸へ抱き上げられた。それから又、經帷子に包

まれて、父君の殺された床の上で、遊んでゐた事もありました。その後貴女は、恐ろしい巨像のやうにおなりなされて、その青銅の腕からは、妾などが、生れた事のないやうにして、お了ひなされた。その上、妾を確と押へて存分にお緊めなされます。貴女は、海の波濤のやうぢや。父君初め兄弟や、妾達の命まで、現世の岸に打ち寄せたを、又もや奪つて行つてしまふ。妾の命も、申さば、貴女次第でござります。』

といつた。王妃は嬉しさに、
『お、それ程までに、思つて呉れるか。少しは、妾のことも、氣に掛けてたもるのか。』と云ふと、王女は、

『氣に掛けるどころか、貴女の憂ひは妾の憂ひ。したが、あのエジストスが、お歿りなされた父王の着物を纏うてゐることが、妾は厭でござります。あの人には、應はしうござりませぬ。肩の幅が廣過ぎて。』と云つた。

『まあ、あの當てつけて言ふことは。』
 と侍女が言つた。裳裾を持つてゐる女も、
 『ほんに、捻くれたお口ではある。』
 と口を出した。王妃は一同を窘めるやうに、
 『一同黙りまするやうに。エジストスを思うて、言うて呉れるは忝けないが、
 妾の耳に逆らはぬ事ならば、妾は、誰れのいふ事でも聞きませう。眞實といふも
 のは、隠れてゐて現にははされぬものぢや。エジストスとこの妾を、弑虐者と
 いふ者は、獄に下してある。妾が夜中に夢魘れて、お前方を起すので、何かと
 口煩さく言ふさうな。妾の眼瞼の脹れてゐるは、苦しい思ひがあると、取沙汰
 するの。嘴の長い妖魔が、妾の血を吸うたと言つて、肌に残つたその痕を、
 教へはせぬかと案じられる。その度毎に、數多の牲を捧げるが、お前方は、い
 ろ／＼と、妾を苦しめるやうな事ばかり言ふ。妾はもう、何も聞かぬ。だが、

妾の耳に、快いことを聞かせる者なら、あの王女であらうとも、耳を借さうの
 熱を煩ふ病人が、冷たい風に吹かれるやうな、一時の樂みが、欲しいのぢや。
 さあ、妾に構はず、この儘にして、置いてたも。』
 と、杖をあげて、侍女と裳裾を持つてゐる女に、彼方へ行けと命じた。各々
 はおぢ／＼しながら、廊下のあちらの方へ行つた。炬火の灯が見えなくなると、
 戸口から射す、幽かな燈光の外には、この暗い内庭を、照らすものは何にもな
 い。そして嚇かすやうなものゝ陰影が、二人の上に落ちた。

四

王妃クリテムネストラは、暫時、黙つてゐたが、良あつて、口を開き、

『妾は、眠られなうて困る。何ぞ、厭な夢を見ぬ工夫はあるまいか。』

『夢を見らるゝ。』と、エレクトラは母の傍へ寄つた。

『夢ばかり見てゐる。ほんに年齢が寄ると、誰れでも夢を見る者ぢや。お前は
どうして、このやうな暗い所に立つてゐるのぢや。さあ、これからは、一つに
なつて事をしよう。世の中には習慣といふものがある。ほんの一語からも、大
事を仕出さすこともある。腹のくちいし時と、饑しい時とは、違ふものぢや。時
はづれに浴みをしたので、命を陥した人もある。』

『貴女は、父君の事を被仰るのか。』と。エレクトラ王女は、父王が浴室で弑せ
られた事を、思ひ浮べながら斯う言つた。

『妾は、これ、このやうに寶石を身につけてゐる。この寶石はそれ／＼功德を
有つてゐる。それでも、用ひ方を知らぬ時は、何の役にも立たぬと言ふもの。
どうしたらば、助かるか。これ、知つてゐるなら、教へてたも。』

『あの妾が。』

『お、お前は發明で、分別も有つてゐる。昔嘶のやうな事でも、昨日の事や
うに覺えてゐる。が、妾はもう、駄目ぢや。妾も考へ事はするが、それを、一
且口に出せば、すぐとエジストスの聲になる。妾は、あの人に勝たうとするが、
何一言も得云はれぬ。あの人、妾を怒らせたは、近い事か、それとも、ずつ
と遠い昔の事か、それさへも判らぬ。妾は眩暈がして、何にも判らなくなる。
自分さへも判らぬ。その恐ろしさが、この妾を、奈落の底へ曳いて行く。エジス
トスは、妾を嗤ふが、それでも、妾には何も言はれぬ。あの人を、怖がらせて
やらうと思ふが、どうも出来ぬ。けれどもお前は言へる筈ぢや。妾の助けにな

るやうな事が、お前は澤山言へるであらう。口言葉で慰められて、それが、何になるといふ者もあらうなれど、さうではない。妾が寝てゐるその上へ、夜晝分たず眼を見張つて、蔽ひ被さるものがある。それは、口も訊かず、咽も締めず、只その儘にして置くばかり。それでも、やはり恐ろしい。氣がついて見ると、傍には、エジストスが睡つてゐる。戸帷も垂れてゐる。すべての物が、妾を見てゐる。妾は恐ろしうてならぬ。でも、さうして、妾は生きてゐる。妾は病人ではない。それとも、病氣のやうに見ゆるかや。病氣でもない者が、どうして、死んで可いものか。妾は眠ると、夢を見る。恐ろしい夢を見て、又起き出でる。それでも、夜は未だ更けてゐない。曉には、間がある。戸口に燃える炬火は、生きてるやうに輝えさかり、妾の夜伽をして呉れるのぢや。だが、このやうに、妾を苦しませるのは、誰れぢや。何處にゐるのか、それさへ判らぬが、其方が、其處にさうやつて立つてゐると、お前も、その仲間のやうに思は

れてならぬ。其方は何者ぢや。一言も言はぬな。お前が居ようとも、居まいとも、何の構ふことではないぞ。が、何故そのやうに、妾の顔を見詰めるのぢや。妾はそのやうに見られたうない。あゝ、もう、このやうな思はしい夢も、程なく消ゆるであらう。いかなる妖魔が、襲はうとも、それに應じた牲の血を、注げば退散するものぢや。』

王女エレクトラは、この時、

『こりや、どのやうな妖魔でも、と被仰るのか。』と訊いた。

『地上の獸、空の鳥、すべての血潮を注ぎ流し、血烟立つた紅の、霧の中で寝ようとも、妾は決して夢を見まい。』

『振りかぶつた斧の下で、牲の血潮が流れたら、その時こそは、母上も、再び夢は御覽じますまい。』

『おゝ、お前は、知つてゐるのか。どのやうな角の獸を、牲にするのぢや。』

王妃クリテムネストラは、王女の傍に近寄つて、斯う訊いた。王女は、その顔をぢつと見て、

『角のない獣を。』と答へた。

『して、それは、どこの檻に入つてゐる。』

『野放しにして、ござります。』

『捧げる儀式は。』と、王妃は詰め寄つた。

『奇しい儀式で。』

『さあ、逐一妾にきかしてたもや。』

『母上、貴方には、判りませぬか。』

『判らねばこそ、聞いてゐるのぢや。して、その牲の名は。』

『一人の女。』

『うむ、妾の侍女の中か。子供か。男を知らぬ女か。それとも、男を知つた

女か。』

『男を知つてゐる女。』

『何時、どうして、何處で牲に捧げるのか。』

『夜となく、晝となく、何時でも、何處でも。』

『さあ、その儀式を教へてたもや。どのやうにして、捧げるのか。妾自ら。』

『貴女が、斧と罌をもつて、手づから遊ばさずとも。』

『それでは、誰れが捧げるのぢや。』

『一人の男が。』

『お、あのエジストスか。』

『母上。妾はたい、一人の男と申したのでござります。』

王女はかう言つて、薄ら笑つた。彼女はオレステスの事を言つてゐるのである。けれど、王妃は、それとも氣附かず、なほも執念く問ふのであつた。

『では、誰れぢや。此處の者か、外の者か。』

『外の者。したが、やはり此處の者でござります。』

『そのやうな謎は止めしやれ。何時にない其方の素直な心は、妾もついで嬉しう思ひます。母が酷いことをするのは、みんな子供の爲向けからぢや。假令、どれほど叱らうとも、後には可哀想に思ふものぢや。娘に辛い目を見せて、それでよいものか。追つけ、祝言させうと思つてゐる。』

『子供心は、さうでもあらうが、母親を怨むこの身は。』

と、エレクトラは呟いた。

『何を呟いてゐるのぢや。すべての事は、過ぎ去つてしまふ。口言葉などは、猶更のこと、何もあとには残らぬもの。假令妾が、どのやうな事をした女にもせよ。それはもう、過ぎた事ぢや。其方が妾を責める言葉も、やつぱり口頭のあだ言ぢや。お前が、いつもいふ人は、其處に立つてゐた。妾とエジストスと

は、此處に立つてゐた。皆眼を見交して、立つてゐたが、何事も起りはせぬ。したが、この中に、父君の眼付が、死の色に變じて行つた。たゞ、それ丈の事ぢや。その他には、何も起りはせぬ。』

『では、その間に、あの斧が、獨りてに動き出して、あのやうな事を、致したのでござりませう。』

と、王女エレクトラは、王妃に一本きめつけた。

『まあ、何といふ事を言ふのぢや、妾の言葉に附け込んで。』

『でも、貴方が、続け打ちに打ち込んだやうな手際には参りませぬ。』

王妃は、いたく不興氣に、

『え、もうそのやうな事は聞き度くない。もう黙りや。父君がおいで遊ばさうとも、このやうに、お話しする計りぢや。驚きもする、泣きもする。昔馴染の友どちに會つたやうに、睦びましょう。』

『恐ろしいお言葉ぢや。あの恐ろしい弑逆の大罪を、母上は、夜食の前の小争論か何ぞのやうに言つてしまふ。』

と、エレクトラは又呟いた。

『妹にもさう言や。臆病犬を見るやうに、妾を見掛けると、直ぐ暗黒へ逃げ込むにも及ばぬと。まぢつと妾に優しくして、話をしたら、どうであらう。客の來ぬ前に、二人の娘に、祝言させる意でゐるのぢや。』

『そして、弟には、母上。弟は二度と歸る事が出来ませぬか。』

『え、彼のことは言ふなど、さう言つてあるに。』

王妃はから叱りつけた。

エレクトラは、これを見て、心地好びに、

『貴女は、弟を恐がつておゐる。』

『誰れが、そのやうな——。』

『母上、貴女は慄へておゐる。』

『誰れが、あのやうな愚者を恐れようぞ。』

『え。』

『人づてに聞いたところでは、あの男は、口さへ碌に訊けず、犬と一緒に寝てゐるとか。人と獸の、差別さへ判らぬとか。』

『いや、弟は健康に育ちました。』

『聞けば、穢くろしい小屋の中で、獸と一緒にゐるとやら。』

『あ。』

エレクトラは、思はず絶望の叫びを上げた。

クリテムネストラは伏目になつて、

『妾も王子として、恥かしからぬ程の、仕送りをしてやつた。』

『いえ、それは、弟を殺させる爲めに送つたのでござります。』

『誰れが、そのやうな事を。』

『貴女のお顔に書いてある。弟が生きてゐるのも、貴女の、その慄へておゐてなされるので讀めます。夜晝、貴女のお氣に掛かるのは弟の事ばかり。彼が歸つて來はしないか、と言ふ事を思へば、心の臓の血が涸れて了ひませう。』

『何とでも言へ。誰れが、あのやうな無宿者を恐れようぞ。妾は、この女主人ぢやないか。戸口を固めさせる家臣に事は缺かぬ。夜晝わかたず、番兵を見張に立たせて置かうと思へば、それも出来る。其方の言ふことは、聴きともない。何と言つても、彼には會ふまい。あの男が、生きようと死なうと、それが、妾の助けにならうか。毎夜々々、妾は、厭になるほど彼の夢を見る。夢は病ひのやうなもので、人の元氣を奪ふものぢや。それでも、妾はやつぱり女主人ぢや。その女主人もあらうものが、物賣女見たやうに、其方と、このやうな話をするのも、何ぞの加減か。今に、それも癒つて了はう。して見れば、妾は病人か。』

ほんに病人と言ふものは、吾が身の病氣を言ひ立てるものぢや。他に、病氣らしい所が、妾にあらうか。』

王妃は斯う云つて、エレクトラの方へ杖を振つて、更に又言葉を續けた。

『妾は、貴方の口から、聞かせて貰ひませう。其方は先刻、妾の病ひを癒す爲めの、牲と儀式との話をした。さあ、確かな所を聞かしたも。どうしても、聞かせはせぬか。妾は、どのやうな事をして、言はして見せうぞ。思はしい夢なぞを、何時まで見て居られうか。自らの苦しみを、癒すことを知らぬとは、愚かな事ぢや。妾が、安らかに眠るには、牲の血を流さねばならぬ。さあ、その牲の女と言ふのは、誰れぢや。』

王妃の、この言葉を聞いたエレクトラは、暗黒から躍り出て、一步づゝ詰め寄りながら、脅かすやうな容子をして、

『牲の血を流さねばならぬ？ おゝ、それぞ、獵夫の唇にかゝつた母上、貴方

の頸から流すのぢや。その罨にかゝつたが百年目、いつかな遁るゝ事ではない。さりながら、その獵夫は、寢てゐる牲は殺しませぬ。この廣い御殿の中を狩り立て、追ひ立てする許り。右方へ遁げれば、血に染まつた寢床に塞がれ、左方へ遁げれば、血に汚れた湯船に行手を遮られて、暗黒と炬火とは、薄暗い血の罨を、貴女の上に投げかける。』と叫んだ。

王妃クリテムネストラは、之れを聞いて、恐怖のあまり、身を慄はせて、屋内へ逃げ込まうとした。王女は急いで、その長く引いた裳裾を捉へて引き戻した。王妃は、壁際へ引き戻され、危いその身を支へながら、兩眼を見開いた。兩方の手は烈しく慄へて、杖を取り落した。エレクトラは勝ち誇つた人のやうに、

『聲を立てようとなされても、重い大氣に抑へられて、音ほねが立ちますまい。氷のやうな双先が、頸へあてられたその心地ぢや。が、まだ双は下されぬ。儀

式が調はぬからぢや。その獵人は、母上の頭髮を手に巻いて、貴女を引き寄せろ。すると、四邊が闇として、貴女の心の臓が、肋骨の中で、波打つてゐるばかり。その一瞬が恐ろしい。長い月日のやうに思はれるのぢや。難船をした人々が、夜の空と雲の下で、徒なる聲を振り立て、遂には死に行く苦しみを、初めてお知りなされよう。囹圄の中が、穴牢に閉ぢこめられて、死ぬるを待つ人を羨みなされよう。火に炙かるゝ牲の獸の、燃えたゞるゝ腹中に、入れられて居るも同前。貴女は、聲も立てられずまい。妾がお側に立つてゐるに、貴女はお眼が離されぬ。この妾の顔色を、讀み取らうとなされるからぢや。貴女は、神々達を御覽になるが、神々達は、晚餐の最中ぢや。丁度、父君が弑せられた時のやうに。神々達の食事は長い。死の事などには、構はれぬのぢや。でも、醉狂な笑ひの神だけは、扉をあけてよろほひ込み、母上とエジストスが、戯むれてゐると思ひませう。したが、さうでない事が判ると、大聲で笑つた儘、

どこへか行つて了しまひませう。貴女あなたは飽あくまで苦しんで、斷末魔だんまつまの苦しみに、たつた一言ひとこと口走くちまるのぢや。貴女あなたはその時とき、妾めかけの顔かほに書いてある文字あざなを、讀み取らうとなされますが、もう遅おそい。この妾めかけの顔かほには、母上ははあさまと父上ちちあさまとの顔容かほづかが交まじつてゐるゆゑ、あの恐おそろしい時の事ことを、思おもひ出でさずには居ゐられませう。妾めかけはぢつと立つてゐて、その斷末魔だんまつまのひと口くちにも、耳みみはかさぬ。貴女あなたのお心こころは、手てづからかけた絹ぬいに掛かかつて、苦しんで居ゐられるのぢや。妾めかけはたゞ、斧きりぎりすの音ねを聞いて、母上ははあさま、貴方あなたの御最期ごさいごを見物みぶつする許ゆるり。さて、その後のちは、貴女あなたも夢ゆめは御覽ごらんじませうまい。又また妾めかけも、夢ゆめを見みまい。たゞ生き残いつた人々ひとびとに、命いのちを樂たのませれば可よい。』二人ふたりは、眼まなこと眼まなことを見合あはした、エレクトラは物狂ものぐるほしく、クリテムネストラは恐怖おそ怖おそに慄ふるへながら……。

すると、その時とき、廊下たうげの方に、炬火たいまつの灯ひが見みえ初はめて、やがて、正面しょうめんの戸口かどぐちが明あるくなつた。そして、一人ひとりの侍女こしもとが走いり出でて、王妃きさきクリテムネストラの

耳みみに、何事なにごとをか囁ささいた。王妃きさきは、初はめ判わからないやうであつたが、やがて、正氣しょうぎづいた人のやうに、顔色かほいろを動うごかして、『燈火あかりを！』と、手招てまねぎした。彼女かれが招まねく度ほどに、炬火たいまつを手てにした婢女はしたが、内庭うちにはに下くだり立たつて、王妃きさきの後うしろに立たつた。やがて、薄暗うすくい内庭うちにはは、煌々くわくわくとして、白晝ひるを欺かたくやうになつた。彼女かれは、侍女こしもとに更さらに再またび用事もちごとの趣おもを囁ささやかせながらも、其處そこに立たつてゐるエレクトラの顔かほから、眼まなこを放はなさなかつたが、漸しだう恐怖おそ怖おその色いろが去いつて、顔かほは毒々どくどくしい勝利しょうりに輝きらいた。侍女こしもとは杖つゑを取り上あげて、王妃きさきクリテムネストラに渡わたした。王妃きさきは、それを手てに取とると、杖つゑと侍女こしもとの力ちからとを借かりて、階段かいでんへ立たち上あつた。急いそがはしく裳ひを曳ひきながら、家いへの中うちへ馳かせ入いつた。炬火たいまつをもつた女共おんなどもも、續ついてその後のちに急いそいだ。

『女子達おんなどもは、何を言いつたのであらう。母上ははあさまは、何を悦よろこんで居ゐらるゝのか。あゝ、もう判わからぬ。どのやうに、悦よろこばしい吉報しらせなのか。』

エレクトラは、この有様ありさまを見て訝いぶしんだ。

五

内庭の戸口から、妹王女のクリソテミスが、獣のやうに駈けて來た。エレクトラはそれを見るより、

『おゝ、妹。さあ／＼早く。どうして一同が悦ぶのか。それを言や、それを聞かしや。』

妹王女クリソテミスは、泣きながら、

『オレステスが、オレステスが……死、死にました。』

『えゝ、黙りや。』

と、エレクトラは、思はず妹王女を突きやつた。クリソテミスは姉に近づき、

『オレステスが死なれたのぢや。』と、又重ねて言つた。エレクトラは、それを聞くと、唇を慄はせた。妹王女は言葉を繼いで、

『妾はそれを知らせに來た。最早一同知つてゐる。一同で報知を聞いたのぢや。最早一同知つてゐる。知らないのは、妾等ばかり。』

『誰れがそれを知らうぞ。』

『でも、一同もう知つてゐる。』

『それは嘘ぢや、誰れが知らうぞ。』

エレクトラは、泣き入る妹を扶け起して、

『嘘ぢや、嘘ぢや、合點がいたか。』

クリソテミスは、涙を拭きながら、

『見たことのない男が、壁の所に立つてゐた。それが報告を持つて來たのぢや。老人と若者と二人で。一同に話してきかせました。一同は、二人を取り巻いて、悉皆聞いてしまひました。』

『嘘ぢや。』と、エレクトラは屹として言つた。

『それを聞かせて呉れないのは、妾達姉妹ばかり、二人の事は、誰れも思つてゐては呉れぬ。姉上、オレステスは死なれたのぢや。』

王女姉妹が、斯う話をしてゐるところへ、慌たゞしく駆けて來た若い下人が戸口に踞んでゐる二人に跪いて、

『えい、退け退け。戸口で何をしてゐるのだ。こんな所に、人がゐると思ふものか。やい、馬丁、馬丁。』

と、大聲で言つた。右側の戸口から、厨人が出て來た。

『何ぞ用か。』

『え、己が咽一杯喚いてゐるのは馬丁だ。小屋から匍ひ出たと思ひや、何だ厨人か。』

年寄の下人は、内庭の戸口に頭を出して、

『厩に何ぞ用があるのか。』と言つた。

『鞍をつけて貰ひ度いのだ。出来る丈早く。判つたか。小馬でも、騾馬でも、牡牛でも、何でも可い、たゞ、早い所にして呉れ。』

『で、何方がおでまじかな。』

『吩咐けたお方ぢや。何も、そんな驚いた顔をするには及ぶまい。己が行くのぢや。さあ、早く。己は直ぐに野へ行つて、殿をお迎へ申して來るのぢや。』

大切な報知を持つて行くのぢや。貴様の馬の頭や二頭、乗り潰さうが構ふものか。』

年寄の下人は、黙つて引き返した。厨人は近よつて、

『で、その報知と言ふのは、どんな事ぢや。一寸聞かせて呉れぬか。』

『なに。一寸位聞いたところで、何になる。殿に申し上げる事が、一言で云へるものか。たつた、今着いた一大事の報知だと言へば、それで澤山だ。ちよつと老老奴、たつた一つの鞍を置くのに、何故そのやうに手間取るのだ。』と、戸口

の方を見て、口小言を言ひながら、『お家の爲めを思ふ者なら、悦ぶべき報知だ。知ると知らぬに限らず、まあ喜ぶべき報知なのだ。』

下人は斯う云つて、又戸口まで行つて、

『やい、やい。鞭はどうした。鞭がなくなつて、馬に乗れるか。馬鹿奴。いくら己様を待たせても、己の方では、馬を待たせぬぞ。』と罵つて、駈け出さうとしたが、厨人が其處に立つてゐるので、

『では、一寸聞かせてやらう。若様オレステス様と言つたところで、當御殿におゐでの事はないのだから、どうでも好いが、到頭ほんとに死んだのよ。』

と、言ひすて、走り去つた。厨人はエレクトラとクリソテミスの方を見た。二人は、抱き合つて横たはつてゐる。クリソテミスの啜り泣きが聞えて、エレクトラの顔は、死んだやうに蒼ざめてゐた。

『お、此處に居たな。これが犬なら、満月に吠えるのだが、お前様がたは、

新月を見ても吠えつくのだ。御殿で吠え立てる狂犬なら、遂ひ出されるに極めてゐる。その意で氣をつけたが可い。』

厨人は、かう言つて、家陰に消えた。

クリソテミスは、半身をもたげて、

『他國で死なれたのだ。馬の上から落されて、地の上を曳き摺られて、顔の見分けもつかなくなつたとやら。その顔さへ妾等は知らぬ。妾等の知つてゐるのは、幼顔ばかり。立派な大人になつたのぢや。妾等にも會ひたかつたらうに。妾は、よくも聞かれなかつた。さ、姉上。あの使男に聞いて見よう。』

エレクトラは、ぢつと物思ひに沈んで、妹の言葉は聞えぬやうに獨語ちた。『最、妾等でする計りだ。』

『さ、姉上。あの二人の男に會ひませう。妾等が、あの人の姉妹ぢやと言ふたなら、皆話して呉れませう。』

「聞いたところで、何にならう。オレステスの死んだのは、判つてゐる。」
「あの人達は、頭髮ひとつ持つて来ては呉れませぬ。まるで、妾等が、この世に生きて居ないやうに。」

「さあ、それ故妾等は、姉妹の生きてゐるといふ事を、見せてやらねばならぬのぢや。妾等二人で、爲なければならぬのぢや。」

「姉上、するとは、何を。」

「今日といふ今日、今宵といふ今宵こそ……」

「そりや、何を。」

「何をとは、クリソテミス。弟が歸らぬその上は、爲すべき事が爲さずにある。それを二人で済まさないやならぬ。其方と妾と、二人して、あの女と姦夫を、殺さないやならぬ。」

「姉上、そりや、母様のことか。」

「いかにも、母上とあの男と、それは爲さねばならぬ事ぢや。これ、クリソテミス、何も言ふまい。考へまい。たゞ、妾と其方と。其方もぢや。その他には誰れが居ようぞ。この外に、父君の陰し子でもあると思ふのか。その人が、助太刀すると思やるのか。そのやうな事はありそもない。」
と、姉王女エレクトラが、妹を勵ますと、
「姉上、貴女は双物でも……」と云つた妹クリソテミスの聲は、慄へてゐた。

六

『なに、刃物』と、エレクトラは侮すむやうに言った。妹王女は、
『せめては、斧でも。』と重ねて云つた。

『斧か。この斧こそは、父君を……』

と、エレクトラは、豫て隠して置いた斧を取り出した。妹王女クリソテミスは驚いて、

『恐ろしいものを。どうして、そのやうなものを。』

『弟の爲めに、妾が取つて置いたのだ。今こそ、二人が使ふのだ。』

『姉上、これでエジストスを。』

『うん、男を。それから女を。いや、女を。それから男を。そりや、何方からでも可い。』

『でもまあ、怖ろしい。姉上、貴方はお氣が狂うた……』

『あの人達の臥床の前には、誰れも寝ては居ぬ。眠つてゐる者を殺すのは、繋
がれた獸を屠ると同じだ。二人が一緒に寝て居なければ、妾一人でも、出来る
事ぢや。それでも、其方は一緒に來や。』

クリソテミスは、怖ろしさに、姉の手を振り拂つて、逃げようとした。エレ
クトラは妹に寄り添つて、

『さあ、其方は強い。ほんに好い身體ぢや。夜毎男を知らずに過したので強い
のだ。靱やかな腰の細さ。少しの際からも、入れよう。窓からでも、匍ひ込め
よう。まあ、何といふ冷たい、強い手であらう。妾を拂ひのける腕の強さと言
つたら。この腕で締められたら、呼吸が詰らう。この冷たい、強い腕で犇と抱
きしめられたら、息が止まつて了ふだらう。どこも彼處も、強いこと。肉置ゆ
たかな肩の上に、垂れ下つた黒髪は、溪間を走る泉のやうぢや。』

と云ふと、妹王女は
 「離して。」と、一言叫んだ。
 「いや、其方は離しはせぬ。この衰へた兩腕で、確かり其方を押へてゐる。逃げようと、すればする程、確かりと纏ひつくのぢや。妾は其方に纏ひつき、其方の身體に根を下し、其方の血に、この心を注ぎ込むのぢや。」
 「離して。」と、遂に妹クリソテミスは逃げ出したが、エレクトラは、直ぐに追ひ縋つて、その衣を掴んで、暴らかにひき戻した。
 「どうぞ、離して下さりませ。」
 「なんの離してよいものか。妾等は一體になるのだ。二人の間を、斷り放す刃があれば、二人一所に殺すまでは、離れぬやうにするのぢや。今となつては、話相手は、この二人の外には、人はないのぢや。」
 「姉上、妾等が、逃げられるやうにして下され。」

「貴方は強い、力がある。春の駒のやうに強い筋肉、強い足をもつてゐる。それでも、妾は引き止める。この双の腕で繋ぎ止めよう。冷たい肌の下には、温い血が通つてゐる。若々しい腕の毛が、妾の頬に觸つてゐる。其方は熱れた果實のやうぢや。妾等二人はこの後は、ずつと親しい姉妹にならうぞ。妾は其方の傍にゐて、婿君を待つてゐよう。その婿君の爲めに、妾は其方に、膏を塗つてやりませう。其方は若い白鳥を見るやうに、香はしい浴みに漬つて、妾の胸許に顔をつき入れよう。婿君は、力の籠つた双の腕で、楽しい臥床へ引き立てる、薄衣を掛けた其方の顔は、火のやうに赤くならうぞ。」
 妹王女クリソテミスは、姉の此言葉を聞いて、眼を閉ぢながら、
 「あゝ、此處では、そのやうな事を被仰るな。」と制した。
 「言はいでかいなあ。妾は、これから、其方の姉と言はうより、召仕にならう、奴隷にならう。其方が、子でも生む時には、夜晝分かつたず、寐床につき添ひ、

蠅も追はう、水も汲まう。可愛い子供が生れたら、抱きかゝへて、守りもしよう。罪のない子供の笑顔が、其方の心に透みとほり、水と張つた恐怖の念も、その輝かしい笑顔に溶けよう。」

「あゝ、姉上。ここから、連れて行つて下され。さもない時は、死、死んでしませう。」

エレクトラは、妹王女の前へ跪いて、

「これ、クリソテミス、其方の口は可愛らしい。したが、その可愛らしい口付で、もの凄いい聲を出すことにならう。妾がかうして立つてるやうに、其方が、あの男の寝てゐる傍に立つた時、あの男は、眼をさまして死神のやうに立つてゐる其方を見よう。」

「姉上、何を言つておいてなされます。」

「其方此處から、妾から逃げ出す先に、爲なければならぬ事ぢや。」

エレクトラは、すつと立つて斯う言つた。そして妹王女が、何か言はうとした時に、手早くその口に蓋をして、

「この外に、仕様はない。何にも聞かぬ。さ、其方が、この事をすると言ふまでは、離すことではない。」

クリソテミスは、「離して」と身悶えして、逃げようとするのを、エレクトラは引き戻して、

「今夜、四邊が静まつたら、あの階段の下へ来ると誓や。誓つてたも。好い子ぢや、否やは言うまい。其方の身體にはな、血の跡ひとつ残して置かぬ。血潮に濡れた衣の代りに、嫁御の衣裳と換へさせうぞ。さ、さ、そのやうに慄へずと。な、今こそ、其方は慄へてゐるが、やがては、それが、悦樂の身ぶるひとならうもの。」

「妾には……。」

「忍んで来ると言やれ。」

「あの、それでも。」

「これ、この通り跪いて、其方の足に口を付ける。」

「出来ませぬ。」

と、一言を残して隙を見たクリソテミスは、戸口の中へ駆け込んだ。ニク

トラは、妹王女の跡を追ひ掛けて行つたが、又直ぐに立ち止つて、

「憎い奴め。最う、妾一人。」

と、決心の臍を固めて、獨語ちた。

七

エレクトトラは、入口に近い壁側を、獸のやうに掘り初めた。折々、呼吸を入れては、四邊を見廻して、それから又、靜かに、セッセと掘り初めた。

と、小さい戸口の上に、一人の男が現はれた。夕陽を背一杯に浴びてゐるので、たゞ黒く見えた。男は靜かに内庭に入つて來たが、人のゐるのに心づいて、薄暗い裡を透かして見た時、凄まじいエレクトトラの眼と、ピッタリと出合つた。

王女は急に突立ち上り、身を慄はして、

「つひに見馴れぬ男だが、其方は、何ぞ用があるのか。この黄昏に、人のする事を覗いてゐるのは。あゝ、判つた。人に知られては、悪いことを、その胸に藏してゐるのぢやな。ならば、この儘にして置いてたも。妾には、妾の仕事がある。さあ、見てゐたところで、仕様もない。早く彼方へ行つたがよからう。」

他の仕事の邪魔はせぬものぢや。』と言つても、その男は、依然として立ち去らぬのみか、尙もその爲る事を見てゐるので、王女は屹として、『これく、何でそのやうに、まじく見てゐるのぢや。妾のいふことが判らぬかいな。それとも、其方は、疑ひ深い質なのか。それならば、言うて聞かせう。妾は、何にも埋めては居ぬ。たゞ掘り起してゐるのぢやわいな。二三日前に埋めた子供の骨を掘り起してゐるのではない。妾は、何にも生んだ事がない。どうして、殺したり、埋めたりが出来ようぞ。妾の手から、この大地が、奪つたものがあるとすれば、それは、妾が生んだものではなくて、この妾を生んだものぢや。まあ、そのやうなものを、掘り返してゐるのぢや、妾は、其方が行くか行かぬに、そのものを掘り出して、抱きしめたり、口を付けたり、吾が子と弟とを一つにしたやうに愛しがらう。』

その男は、エレクトラのする事を、不審さうに見てゐたが、今度は、その言ふことを訝しんで、『それでは、其方は地の下から、そのやうな者を掘り返して、それを抱きしめたり、又口を付けたりする程、この世には誰一人、愛しい者が無いと言ふのか。たつた一人きりなのか。』

と訊いた。

『人の母でもないし、母も持たぬ。人の妹でもないし、又妹も持たぬ。戸口に寝てゐるが、飼犬ではない。口こそ訊くが、言葉は判らぬ。呼吸をしてはゐれど死んだものも同然。長い髪は持つてゐるが、女らしい感じは、ひとつも有つては居ぬ。が、そのやうな事は、どうしても可い。さう、早う行つて下され。早うく。』

エレクトラが急ぎ立てるのを、その男は、ジロリと流眼に見て、さて、落着

いた語調で言つた。

『ちと、此處で待ちはさねばならぬ人がありますのぢや。』

『なに、待ちはす人？』

と、王女が審しんだ。

『貴方は、この家の者か。それとも婢女か。』

その男は、良しはらくしてから、かう訊ねた。

『いかにも、この家の婢女ながら、其身は此處に何の用があるのぢや。とつと』

と行つて下されい。』

『いや、私は呼ばれるまで、此處に待つてゐなければならぬ。』

『なに、呼ばれるまで。それは嘘ぢや。主の殿は、お出ましぢや。後に残つた』

あの王妃は、其方に何の用があらうぞ。』

『いや、私ともう一人の男とで、その王妃の許へ、使者に來たのぢや。』

と、その男が答へたので、エレクトラは、口を噤んだ。男はなほも語を續けて、

『實は、オレステス様の死られた報知を持つて來たのぢや。あの方は、私と丁度同じ年頃ゆゑ、仲好く暮らしてゐたものだ。馬からお落ちなされた所を見てゐた私が證人ぢや。それから、私と連れ立つて來た老人は、吾々の面倒を見て呉れた人ぢや。』

これを聞いたエレクトラは、その男の顔を屹と見て、

『何故また妾に、その事を知らせたのぢや。このやうな所へは、知らせに來たのぢや。その報告を嬉しがる人に知らせてやつたが可い。其方は、かうして生きてゐるに、其方より傑れたあの子は、死んで了つたのぢや。其方の眼は、妾を見てゐるのに、あの子の眼は瞑ぢ、其方の口は、ものを言ふのに、あの子の口は、塵泥に塞がつてゐる。あゝ、妾は、其方を呪ひ度い。さゝ、早う行つて』

下され。早う、早う。』

この王女の繰り言を聞いて、

『はて。』と、その男は首を傾げて、『およそ、この家の人として、私の持つて来た報告を喜ばぬものは、誰れ一人なかつたに。そのやうに歎かるゝとは。したが、何ごとも定業ぢや。生ある者は、死ぬる習ひだ。オレステスとても、その通り。ほんに、あの人には、喜びが多過ぎた。』と云つた。

『まあ、順々とよう死の事を言ふ人ぢや。したが、妾はかうやつて、こゝに蹲つて、あの子の歸つて来ぬこと計り思つてゐるに、家の中では人々が、歡樂を盡くしてゐる。その人達は、飲み食ひし、睡つたり、子を生んだりするのに、あの子だけは歸らぬ父の御名を慕うて、地の下へ行つてしまふた。そして、妾は唯一人、このやうに取り残されて、森の中の獣にも劣るやうな、寂しい、荒涼しい、世に存ふるのか。』

オレステスの横死の報告を聞いて、エレクトラの歎き悲しむ有様を、先程からちつと見てゐたその男は、漸次と、注意深く、女王の容子を観るやうになつた。

『で、其方の名は。』

と、その男が訊いた。

エレクトラは冷やかに、

『妾が誰れであらうと可い。妾は、お前様の名を聞きはせぬ。』

『其方は歿られたアガメムノン王や、オレステス殿に、縁故の方と思はるゝが。』

『なに、縁故とか。いかに、妾はアガメムノン王が、無慘に流した血を受け

た、血族の一人、エレクトラぢや。』

『いや、そりや嘘ぢや。』

王女が名乗りもあえぬに、彼の男は、一言の下に打ち消した。王女は呆れて、

「なに、嘘ぢや。妾を侮んで、名さへ付けて置いては呉れぬか。父兄弟のない故に、子供達の物笑ひの種となるのか。」と、座ろに悲しく情なく思つた。

「エレクトラは、お身よりは十歳も若からう。王女は、身長が高い、悲しげな眼付の中に、優しい所があつた。其方の眼は、血走つてゐる。王女エレクトラは、塵の世を遁れて、墓守となつてゐられる。お附きには、只二三人の侍女がゐる計り。さゝやかな庵室に起き臥して、犬がその庵室の周圍を廻り、王女が外出の時には、犬は足許に纏ひ付かう。」

「さうぢや、さうぢや。さあ、王女エレクトラの、美しい物語を聞かして呉れ。妾が王女に會ふたなら、その話をして聞かさう。」

と、聲を塞らせて、斯う言つた。

「こ、これが王女か。今會つてゐる、これが。」

、彼の男は、いたく驚いた。驚くのも尤もである。この男こそは、王女が

待ちに待つてゐた、オレステスその人である。そして、今の先、思はぬ災害に會うて、死んだといふ報知を得て、氣の狂はんばかりに悲歎と絶望とに陥つた、

—その本人のオレステスその人である。彼れは更に言葉を續けて、

「この姿は、何事ぢや。貴女は饑い目に會はされてか。打たれ擲かれてか。」

「そのやうに、根問ひする其方は誰ぢや。」
と、王女はちつとオレステスの顔を視て、斯う訊ねた。王女もオレステスも、互に打ち絶えて會はぬ故、待ち焦れてゐるその當人が、眼の前にをりながら、更に、それと知る由もなかつたのである。

「さあ、伍什の様子を聞かして下され。」

と、オレステスも、これが、まさかに王女とは思はぬ故に、その問ひには答へないで、先づこの女の、身の上を聞きたいさうとした。

「饑いもあつた。打たれもした。どんな王妃様でも、洗ひ流しては肥えられ

ぬ。どんな尼でも、打ち擲かれて勤行はならぬ。裳裾も袖も、長い衣服にひきかへて、今見るやうな短かい襦袢。ぢやが、そのやうな事は何うでも可い。』

『貴女は、何をして居らるゝ。夜毎、何をして居らるゝのぢや。貴女の眼つきは恐ろしい。エレクトラ殿。まあ、聞いて下され。』

『其方は誰れか、妾は知らぬ。又知り度うも思はぬが、そのやうに、傍近くは寄つて貰うまい。妾は、男に逢ひ度うない。』

と、壁の方に向いて、蹲つた。オレステスは、聲を低めて、

『聞いて下され。時刻が移る。高い聲では言はれぬが、まあ聞いて下され。オレステスは生きてゐるのぢや。』

これを聞くと、エレクトラは、いたく驚いて、身動いだ。オレステスは、それを制して、

『しつ！ 静かに。騒げば、あの男の身の大事ぢや。』

『何處にゐるのぢや。自由のきく身か。何處に隠れてゐるのぢや。囚はれの身とならば、どこぞの隅に幽閉められ、空しく命を落さうもの。それでも妾には、どうも出来ぬ。其方は、妾を苦しませに來たのか。』

『いや、オレステスは、私のやうに壯健ぢや。』

『それならば、その身に危害の及ばぬ前に、落したも。どうぞして、報知がし度い。妾は、其方の足に口をつける。どうぞして、報知せてやり度い。報知がし度い。もし一夜でも、此處に止まらば、命を取られるに定つてゐる。』

『あの男はな、今宵命を取らるゝ人の爲めに、此處へは來たのぢや。』

この一言に、王女は、少なからず驚いて、

『さういふお前は？』と、ぢつとオレステスの顔を見た。

この時、戸口から、老いたる下人が、静かに庭内へ入つて来て、オレステスの前に身を投じて、その足に口を付けた。そして身を起すと、四邊を見廻して

その儘行つて了つた。王女は心を鎮めかねて、

『お前は誰れぢや。早う知り度い。』

この時、オレステスは、初めて静かに斯う言つた。

『この内にゐる犬すらも、この私を見知つてゐた。それにどうして、姉上が。』

『おゝ、オレステスか。』

と、王女は、驚きと嬉しさの餘り、聲をあげて、兄弟の腕に身を投じて、啜り泣いた。

八

『しッ！こゝの者に聞かれたら、私の命は、其奴の手中に落ちるのぢや。』

と、オレステスは、急いで斯う言つた。エレクトラは、聲を低めて、

『オレステス。誰れにも聞かれはせぬ。この眼に、お前を見せてお呉れ。した

が、妾は、お前に見られるのが恥かしい。何故そのやうに、見てゐるのぢや。

妾はお前の姉とはいへ、屍骸に變りはない。お前が見て、驚くのも道理ぢや。

妾は王女に生れついて、美しい姿をしてゐたと、思ふたこともあつたのぢや。

その頃は、夜になれば、妾見の前に立つて、燈火を吹き消し、處女らしく、胸を波立たせながら、聖いものゝやうに、闇にも輝く、おのが裸體に觸つても見

た。夢のやうな、月の光に包まれたやうにも思はれた。幾男の心を動かした、わが黒髪も、汚れ果てた。妾は、これらの美しい嬉しさを、復讐といふ念に變

へて、父上に捧げました。それに、死といふものは、嫉み深いもので、父君は、妾の婿がねに、恐ろしい怨恨、その怨恨に妻はせて下された。弑逆の罪を犯した二人が、妾をまともに見ることが出来ぬと知つた。これ、何故そのやうに、妾を見るのぢや。お前は、大層、慄へてゐる。』

『慄へるならば、慄はして置からう。が、私の爲ようとする事を、あの男が知つたなら、よも慄へずには居られまい。』

『では、お前がそれを。あの、一人でする意か。可哀想に。一人も相手はないのか。』

『私の養父が、一緒に来てゐます。したが、手を下すのは、私のおぢや。』

『妾はこれまで、神様といふものを見たことはないが、神様は、屹度お前等をお助けなさらう。』

吹込んだのは、神様のなされた事ぢや。私が、この事を恐れて、爲なかつたら、定めし、神様に獻殺されて了ふだらう。』(オレステスは復讐をするのに、デルフあるから、それに背けば神罰を蒙らうとの意)

『それではお前が、それを爲るのか。』

『いかにも、私はあれを爲了せるまで、この眼に母を、見ない覺悟ぢや。』

『妾を見や、オレステス。母上は、妾をこのやうになされた。お、よう戻つてたもつたぞ。自らの事を、死んだ者のやうに言ひ觸らし、よくまあ生きてゐてたもつた。お前は、そのやうにして、この妾を見て呉れるが、妾はもう、何でもない。往時のエレクトラが有つてゐたものは、何一つ、失くして了つた。すべてのものを和らげて、月にかゝる銀色の霜のやうに、すべて女性の美しさを増し、その心から、凶事をのぞく。耻羞さへも捨て果て、身ぐるみ剃がる追刺の手に、かゝつた人も同じ事。妾とても、祝言の夜の喜びや、子供を持

つ苦痛を、知らぬことはなけれども、呪いと絶望の他には、何ひとつ生みはせて、あの豫言者を見るやうに、一風變つた生活をしてゐた。塔の上に寢ては、幾夜も睡らぬ夜を明かし、もの淋しい内庭で、犬と一緒に叫んでゐた。妾は人から嫌はれたが、妾は一同を見てやつた。夜晝分かつた、復讐の一念より外の仕事は思はなかつた。明けては暮るゝ日毎日毎は、望みを遂ぐる旅路の里標。』

『おゝ、姉上。』

と、オレステスは王女を見た。

『これ、妾を何とするのぢや。』

『貴女は、母上に似て居らるゝか。』

『妾がか。』と、エレクトラは暴らかに、『何で妾が、似て居ようぞ。母上のお顔は、見ないが好い。死なれてから、二人して、お眼にかゝるも遅くはない。母上は、白き下衣を父君にかぶせ掛け、眼も見えわかず、足搔もきかぬその隙に、

散々にお撃ちなされた。斧を高く振り翳して……。』

『おゝ、姉上。』

と、オレステスは、聞くに堪えぬ面持して、斯う言つた。王女は確りした聲で、

『母上のお顔には、それがその儘残つてゐる。』

『私も追付、それをするのぢや。』

『自分の爲る事の、出来る人は仕合者ぢや。そのする事といふものは、靈魂を休ませる、臥床のやうなものではある。傷れたる靈魂が、安らかに睡られるのぢや。』

と、言つてゐると、奥の方の戸口から、眼の光つた、半白の鬚の生えた、強さうな老翁が入つて來た。エレクトラはそれを見て、

『弟。ありや誰れぢや。』

と訊いた。老翁は急がはしく、

「これ、二人ともに、気が狂うたか。息吹ひとつ、ものゝ音ひとつでも、妾が身の、破滅の種ぢや。静かにせぬか。」

と窘めた。エレクトラは迂散らしく、

「こりや、誰れぢや。」

と訊くのを、オレステスは遮つて、

「姉上は、御存じないか。私のことを、思うて呉れらるゝならば、どうぞ、この人に禮言うて下されい。私をこゝまで連れて來た禮を言うて下されい。」

と云つて、更に老翁に向つて、

「これが姉王女、エレクトラぢや。」

と言つた。この老翁こそは、オレステスの養父であつたのだ。

これを聞いて、エレクトラは、嬉しさうに喜んで、

「おゝ、ほんに然うであつた。妾や嬉しさに取り紛れて居りました。さ、萬望、お手に口を付けさせて下されませ。妾やまだ、神様といふものを見たことがござりませぬば、神様にお禮の申しやうを知りませぬ。せめて、貴方のお手へなりと口を付けさせて下されませ。」

「静かに、静かに、エレクトラ殿。」

と、老翁が制した。

「いえ、弟をお連れ下すつた、お禮は言はねばなりません。すべての思ひは、空となる。たゞ自らの事を果たす者に、幸福があるのぢや。その人と、事を共にする者に、幸福があるのぢや。隠せる斧を掘り出したり、炬火を執つたり、戸を開いたり、戸口で中を窺つたり！」

「え、お黙りなされ。」

と、老翁はエレクトラを抑へて、その口に蓋をした。そして、オレステスの

方を見て、
 『王妃が、お待ち遠ぢや。侍女衆が探しに来る。さあ、オレステス。家の中には男ぎれば一人も居ない。』

と、聲を剛ませて、斯う云つた。

オレステスは、ぢつと恐怖の念を押し鎮めて、つと身を起した。正面の戸口には、明りがさして、やがて、炬火を手にした婢女が立ち出でた。その後には、侍女が続いた。エレクトラは、身を翻して暗中に隠れた。侍女は、二人の男に會釋して、先きに立つた。婢女は、持つてゐる炬火を、戸口の柱に結びつけて、身を引いた。オレステスと老人は、階段を登つた。オレステスは眩氣がするやうに、一寸眼を閉ぢた。養父は後に続き二人は忙しく目配せした。

二人が内へ入ると、正面の戸口は、閉ざれて了つた。

九

エレクトラは、一人後に残つて、心を痛めてゐた。首を垂れて、獸のやうに戸の前をあちこち往き來してゐたが、ふと立ち止つて、

『あつ、忘れた。斧を渡してやらなかつた。あゝ、どうしたら、可いだらう。』

と、一人やきもき思つてゐる矢先きに、クリテムネストラの鋭い叫び聲が聞えた。エレクトラは、妖魔のやうに猛り立つて、

『擲て、もう一撃!』と叫んだ。

途端に、又もや悲鳴がきこえた。それに續いて、右手の戸口から、妹王女クリソテミスを先きに、婢女達が走り出た。クリソテミスは立ち止つて、

『何が初まつたのであらう。』

『王妃様は、あのやうに、夢を見てはお泣きなさる。』と、一番先きの婢女が言

つた。

『内に男がゐるらしい。何でも、男の足音がする。』と、二番目のが言つた。

『戸には、悉皆錠が下りてゐるのに。』と、三番目のが訝しんだ。

『人殺しぢや……内に入殺しがあるのぢや。』と四番目のが云つた。

『あつ！』と、最初の婢女が聲を立てたので、又何事が起つたのかと。一同は少なからず駭いた。

『最初の婢女は、更に言葉を續けて、

『戸口に、誰れか。』と、闇を透して云つた。

『おゝ、姉上ぢや、姉上ぢや。』と、妹王女クリソテミスは其方を見やつた。

二番目の婢女が、

『何故、あの方は、黙つてゐるのぢや。』と言つた。

『姉上、何で黙つておゐるでなされる。』と、クリソテミスが訊ねた。

『男共を呼びに行かう。』と、最初の婢女は、左手へ走り去つた。

『姉上、戸をあけて下され。』と、クリソテミスが言つた。

『王姉様。おあけ下さい。』と、一同も言つた。

そこへ、最初の婢女が、急いで立ち返つて来た。

『さあ、皆さま、早く此方へお歸りなされ。それ、其處へ、エジストス様

が。』と知らせたので、一同驚いて、眼を見會はした。婢女は語を繼いで、『この騒動を御覽したら、妾等は、助かりさうもない。』

『さうとも。さあ、早く。』

と、一同は、もと来た方へ歸つて行つた。やがて、右側の戸口から、エジストスは唯一人、供も連れずに歸つて来た。

『誰れも出迎へぬのか。燈火を見せる者はないか。なんぼ言うても、役に立た
る。』

と、口小言を言ひながら、内庭へ入つて来た。エレクトラは、それと見るよ
り、柱の炬火を放して、その足下に身を屈めた。ゆらめく灯影に、人の形を見
とめて、ひと足あとへ退つたが、

「この怪し氣な女は、誰れぢや。見も知らぬ者を、身が眼通りへ出すことは、
罷りならぬと、言うてあるに。」と、その顔を覗き込んだが、「おつ、エレクトラ。
其方や何人の許しを得て、身が前へは參つたぞ。」

「燈火を御覽に入れましては、悪うござりまするか。」

「うむ、好いわ。今日は特別、其方に係はる儀ぢや。オレステスに就いて、報
知をもたらした男は、何處に居るな。」

「内に居ります。手厚う、もてなされて。」

「で、彼等は、オレステス死去の報知をもたらしたのぢやな。誤りのない報知
を。」

「眞實でござります。確かな證據がござります。」

「其方の聲は、なんといふ聲ぢや。いかなれば、身が前へ出て、物を言はうと
思ふたのか。炬火などを持つて、何故この邊をうろつくのぢやな。」

「眼が覺めたのでござります。強い人には、付き度くなりました。炬火をもつ
て、御案内致しても、宜しうござりませうか。」

「うむ。戸口まで案内しやれ。あゝこれ、何故そのやうに踊るのぢや。氣をつ
けぬか。」

エレクトラは、怪しき踊りの足取りで、エジストスの廻りを廻つたが、やが
て、つと其の前へひれ伏して、

「お危うござります。こゝが即ち階段でござります。」と云つた。

十

「何故これへは、燈火を點さぬ。」

と云つて、エジストスは戸口へ入らうとしたが、屹となつて、

「ありや、誰れぢや。」と、人影を見て、怪しんで斯う訊いた。

「お眼に掛からうと、待つてゐる人々でござりまする。妾は、度々貴方の前へ出て、不作法な事ばかり致しましたが、今こそ、御前を引き下る、好い機会を見つけました。」

エジストスが、戸口へ入ると、やがて、騒がしい物音がして、彼れは、戸口の右の窓へ立ち現はれ、窓掛を引き千切つて、

「出合へ、出合へ。人殺しぢや。助けて呉れ——。」と叫んだが、また後方へ曳き摺られながら、

「聞えぬか。誰れも居らぬか。」と、再び窓へ顔を出して叫ぶ。

「父君が、アガメムノン王が聞いておるぢや。」

と、エレクトラは、その顔に向つて言つた。エジストスは、「うむ」と、ひと聲云つた儘、曳き摺られて行つた。エレクトラ王女は、息苦しげに喘ぎつゝ立つてゐた。婢女達も狂氣の如く走り出て、庭に集つた。その中には、妹王女のクリソテミスもゐた。

「姉上、姉上、さあ、行きませう。オレスティスは内にゐる。あの人が偽たのぢや。」

と、言ひかけると、叫び聲が入り亂れて、戸外の騒ぎも激しくなつた。

妹王女は、更に言葉を續けて、

「オレスティスは、廊下にゐる。皆が、その足に口を付けてゐる。心私かに、エジストスを憎んでゐた者は、残餘の人を討ち滅すので、家の中は屍骸の山、生

きてる者も、創つき傷れ、勇み立つたり、抱き合つたり……』と云つた。
 戸外の騒ぎは、愈々激しくなつたので、婢女達は悉く逃げ去つて、妹王女クリソテミスと、姉王女エレクトラの唯二人が残つた。戸外からの光が、内庭へも射して来た。
 『あれ、歡呼の聲をあげて、炬火を澤山に照らしてゐる。姉上、あれが聞えまするか。』

『聞えないで何としよう。』エレクトラは、戸口に蹲つて居たが、ちつと耳を傾けて、『今、この身の中には、樂の音が鳴り響く。數知れぬ炬火と、人の聲音は、地の上に鳴りわたる。あれは、妾を待つてゐるのぢや。妾の音頭を待つてゐるのぢや。が、妾には、どうもそれが出来ぬ。果しもない大海原が、妾の上へ被さつてゐるやうで、それを上げる力が、妾にはない。』と云ふと、

『姉上、あれが聞えまするか。』と、妹王女クリソテミスは、心氣昂奮りて、も

の狂ほしきまでになりて、

『オレステスを、手舄きにしてゐる。あの人々の眼も頬も、涙の爲めに光つてゐる。お、あの人達は、泣いてゐる。貴方は、あれが聞えまするか。』

妹王女は斯う云つて、戸口から戸外へ駈け出した。

エレクトラは、階段を下りて、酒神の女祭司のやうに、うしろ様に頭をあげ、投げるやうに膝を上げ、兩の腕をさしのべて、怪しい舞踊を舞ひ初めた。

『お、姉上。』

と、また其處へ入つて来た妹王女クリソテミスが斯う云つた。エレクトラは立ち止つて、

『何にも言はずに、踊りませう。さあ、皆も其處へ来て、妾の手振にならふが可い。悦びの重荷を背負うて、妾は踊るのぢや。妾等のやうな、仕合せな人間には、何もする事がない。たゞ黙つて踊るのぢや。』

エレクトラは斯う云つて、その緊り詰めた勝利の歩みで進んだが、突然バタリと倒れた。妹王女クリソテミスが、驚いてその上へ走り寄つて見た時は、エレクトラは、もう身動きもしなかつた。妹王女クリソテミスは、驚き悲しみながら、階段を馳せ登つて、力任せに扉を叩いて、

『オレステス、オレステス！』

と叫んだ。けれど、………噫、それに答ふるものとは、深いく沈黙の外はなかつた。

エレクトラ 終

大正三年九月五日印刷
大正三年九月五日發行

(定價金拾錢)
(郵税金貳錢)

アカギ叢書
第五十四編
エクレトラ

著者 村上 静人
發行者 赤城 正藏
印刷者 中田 福三郎
印刷所 秀英舎第一工場

東京市麹町區三番町五〇
東京牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
東京牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發兌所
元

東京市麹町區三番町五〇
電話番町二二八〇番
振替口座東京一〇四三二

赤城正藏
全國各書林

の本日

□□□
□□□
□□□
□□□

ムラクレ 書叢ギカア

特色

□□□
□□□
□□□
□□□

○紳士の標準智識○

1. 古今東西の科學藝文中 紳士の標準智識たるべきものを聚取し解説せり

2. 従前の刊行物の高價、尨大、難澁なるが爲めに當然辨知し置くべき著述なるにも關せず止むを得ず困却せられたるもの多きを憂ひ専ら廉價、平易、簡明に解説し刊行せり

3. 内外の傑作の紹介は簡單にコンデンスしたりと雖妙味に到つては毫も減殺する所なし

○世界學術の叢淵○

◀各册に金拾錢也▶

アカギ叢書

毎月數篇 逐次刊行

(定價金拾錢 郵稅各貳錢)

○第一編

歐洲文藝 村上靜人編

人形の家 (ハ名)

○第二編

哲學叢話 中島文學士編

プラグマチズム

○第三編

歐洲文藝 日野月文學士編

廢都

○第四編

社會學 葛西文學士譯

群衆心理 (上卷)

○第五編

歐洲文藝 原ドストイェフスキイ作

痴人

○第六編

歐洲文藝 村上靜人著

ウエントと其著作

○第七編

哲學叢話 三浦文學士篇

ベルグソンの哲學

○第八編	歐洲文藝	オスカア・ウワイルド	村 上 静 人 譯	▲	サ	ロ	メ
○第九編	哲學叢話	中島文學士編	▲	オ	イ	ケ	ン
○第十編	博物叢話	寺尾理學士編	▲	イ	ダ	ン	の
○第十一編	日本史談	龍居文學士著	▲	文	政	化	江
○第十二編	歐洲文藝	フライタツハ	齋藤文學士編	▲	劇	喜	新
○第十三編	歐洲文藝	スチヴンソン	齋藤文學士編	▲	壺	の	鬼
○第十四編	歐洲文藝	トルストイ	村上 静 人 編	▲	復	活	
○第十五編	歐洲文藝	(絶版發賣禁止)	▲	レ	デ	イ	ー
○第十六編	美術叢話	佐々木文學士著	▲	奈	良	の	美

○第十七編	歐洲文藝	モーパッサン	村上 静 人 編	▲	女	の	一
○第十八編	歐洲文藝	メーテルリンク	村上 静 人 編	▲	モ	ン	ナ
○第十九編	日本史談	龍居文學士著	▲	日	本	建	築
○第二十編	社會學叢話	ル・ボノン	葛西又次郎譯	▲	群	衆	心
○第二十一編	美術叢話	桑山文學士編	▲	支	那	の	美
○第二十二編	歐洲文藝	板垣文學士編	▲	ワ	ン	ダ	ー
○第二十三編	歐洲文藝	ストリンダベルヒ	村上 静 人 編	▲	父		
○第二十四編	歐洲文藝	沙上 静 翁	村上 静 翁 編	▲	ハ	ム	レ
○第二十五編	歐洲文藝	ダヌンチオ	日野月文學士編	▲	ジ	ヨ	バ

生
 ナ
 ナ
 要
 理
 術
 ク
 ト
 ト
 ニ
 (上卷)

○第廿六編	歐洲文藝	全	全ジヨバンニ (下卷)
○第廿七編	歐洲文藝	村上 静人 編作	神曲
○第廿八編	日本史談	龍居 文學士 著	鎌倉の史話
○第廿九編	歐洲文藝	ヘッベル 文學士 原作	ユーデット
○第卅編	歐洲文藝	ピエトロ・コッサ 編作	皇帝ネロ
○第卅一編	禮節叢話	獨逸大使館員 著	歐洲禮節
○第卅二編	歐洲文藝	村上 静人 編作	海の夫人
○第卅三編	宗教叢話	東北大學 講師 正編	オイケンの宗教思想
○第卅四編	地理叢話	マルコポーロ 原作	東方見聞録

○第卅五編	歐洲文藝	トルストイ 原著	ドストイエフスキイ論 附モウパッサン論
○第卅六編	歐洲文藝	ストリンデル 編	絆
○第卅七編	歐洲文藝	トルストイ 原作	暗の力
○第卅八編	歐洲文藝	シヨウ原 編	武器と人 (ナヨコレツト兵隊)
○第卅九編	歐洲文藝	イブセン 原作	鳴
○第四十編	歴史叢談	小林 愛雄 著	神話と傳説
○第四十一編	歐洲文學	ズーデルマン 編	マダダ (故郷)
○第四十二編	歐洲文藝	ドストイエフスキイ 編	虐げられし人々 (上卷)
○第四十三編	歐洲文藝	ツルゲニエフ 原作	初恋

○第四十四編 演藝叢談 小林愛雄著 西洋演劇史

○第四十五編 歐洲文藝 フロオベル原作 莎拉・ンボ

○第四十六編 音樂叢話 小山文學士著 日本淨瑠璃史

○第四十七編 歐洲文藝 モーパッサン原作 ピエール・と・ジアン

○第四十八編 歐洲文藝 ダヌンチオ原作 死の勝利

○第四十九編 歐洲文藝 シエンキウイツチ作 何處へ行く

○第五十編 歐洲文藝 ドストイェフスキイ編 罪と罰

○第五十一編 歐洲文藝 ドオデエ原作 サフオ

○第五十二編 歐洲文藝 ドストイェフスキイ原作 虐げられし人々 (下巻)

虐げられし人々 (下巻)

○第五十三編 歐洲文藝 ハウプトマン原作 日の出前

○第五十四編 歐洲文藝 ホフマンスタール原作 エレクタラ

○第五十五編 歐洲文藝 ゲーテ原作 ヘルマンとドロテア

○第五十六編 歐洲文藝 イブセン原作 幽霊

○第五十七編 歐洲文藝 ソラ原人作 女優ナ

○第五十八編 歐洲文藝 ヘツベル原作 マリア、マグダレーネ

○第五十九編 歐洲文藝 ショウ原人作 ウォーレン夫人の職業

○第六十編 歐洲文藝 ツロオベル原作 マダム・ボバリ

○第六十一編 歐洲文藝 文學士魚澄總五郎著 新文明源流 (日本洋學の發達)

新文明源流 (日本洋學の發達)

274
970

○第六十二編 歐洲文藝 文學士 佐々木青葉村著 ▲日本の彫刻

○第六十三編 歐洲文藝 文學士 齋藤茂編 ▲シイザイ傳

○第六十四編 歐洲文藝 イエーッ原 栗原古城譯作 ▲幻の海 附イエーッ詳傳

○第六十五編 歐洲文藝 山本有三編作 ▲名譽

○第六十六編 歐洲文藝 東北大學講師 佐藤正著 ▲近世社會運動

○第六十七編 歐洲文藝 文學士 小山龍之輔編 ▲源氏物語 (上卷)

○第六十八編 歐洲文藝 トルストイ原作 板垣文學士編 ▲アンナ、カレニア

○第六十九編 歐洲文藝 文學士 小山龍之輔編 ▲源氏物語 (下卷)

● 頒布部數十萬を越へたる 赤城叢書既刊目錄 ●

終

